

【アクティブ・スチューデント応援奨学金】活動報告書

約1か月にわたるフィリピン、セブ島での活動内容を以下に報告する。

〈活動テーマ〉 語学研修とセブ島のスラム街やごみ山の実態調査・子供たちへの支援活動

〈活動場所〉 フィリピン・セブ島

〈活動時期〉 2020.2.22(土)~2020.3.18(水)

〈目的〉

今回の活動における主な目的は、①英語力向上 と②貧困地域の子供たちの現状を調査する ことである。発展途上国では経済格差が著しく、貧困層の人々の社会進出が促進されにくい。私は、発展途上国の社会的に弱い立場の人々が貧困から逃れ、差別を受けないために最も必要なものは教育であると考えている。リゾート地のセブ島でも、普通に学校に通うことが出来ないストリートチルドレンが数多く存在する。たとえ入学出来たとしても、学用品が買えない、家の仕事を手伝わなければならないといった理由で、小学校では30%、高校では50%が卒業まで在学出来ないのである。そのような地域でボランティア活動を行うことで貧困の背景、写真や映像では分からない人々の考えまで学ぶことを期待した。

〈活動の具体的内容〉

語学研修：平日のスケジュール(例)

6:30am	起床
7:00am-8:20am	語彙
8:20am-9:00am	朝食
9:00am-10:35am	リーディング&ライティング (マンツーマン)
10:45am-12:20nn	グループ授業
12:20nn-1:20pm	昼食
1:20pm-2:55pm	自習
3:05pm-4:40pm	スピーキング&リスニング (マンツーマン)
4:50pm-6:25pm	発音・アクセント
6:25pm-7:20pm	夕食
7:20pm-8:55pm	映画・音楽・文化など
9:00pm-0:15am	1日の授業の復習・友達と談笑
0:45am	就寝

<授業について>

セブ留学の最大のポイントは、英語圏の留学に比べて費用を抑えつつもマンツーマン授業を受けることが可能なところである。私が受講したコースでは、各四技能に対して毎日45分ずつの勉強時間が設けられていた。マンツーマンで指導してもらえるため、自分の弱点を中心に英語を学ぶことが出来た。特にスピーキングに苦手意識を持っていた、良い意味で話すことから逃げられない環境であったため、練習する機会が沢山あり、間違った文法や発音は先生にその場で指摘してもらえた。

グループ授業は最大4名のディスカッション形式で行われた。私が受講した時のトピックは“Morally Bankrupt（道徳心の崩壊）”で、このトピックに対して様々な角度から学びを深めていった。例えば、現代の若者は道徳心が損なわれているか賛成と反対に分かれてディスカッションしたり、先生から与えられた単語を分担して調べてきて、その単語を使った分かりやすい例文などを紹介しながら意味を説明したりした。さらには、権威への信頼や子育てに対する配慮などのトピックに対して、今と昔とを比較した時、状況は悪くなったか、良くなったか、それとも変わらないかをそれぞれ自分の意見を述べた。そして、その主張を支える自分なりの根拠も加えた。国による考え方や国の制度によって意見が異なり、国の垣根を越えてディスカッションするのは大変興味深いものであった。

私の個人的な感想としては、どちらかといくとこの学校は英語の基礎を学びに来ている人が多かったと思う。各技能ですでにある程度の英語力がある人は物足りなく感じるかもしれない。

<生活について>

私が滞在していた寮は学校と同じ建物内にあり、食事も三食提供されていたため特に生活に困ることなく過ごすことが出来た。生徒はベトナム、タイ、台湾、ロシアなど様々な国から来た人で構成されており、年齢も全く異なっていた。授業や同じ部屋で仲良くなった友達と、授業後に一緒に勉強をしたり、談笑したりしたことも素晴らしい経験であったと思う。それぞれの文化や言語を教えあっているうちにあっという間に時間が過ぎていった。授業の無い週末は、友達と観光地に遊びに行くことも多かった。学校での友達との関りは、間違いなく留学生生活をさらに充実させたと思う。外出の際は安全を第一に考え、地元の移動手段は使わずに、タクシーを使うようにした。

実態調査・支援活動



<スラム街の子供たちと交流・食事配給>



私が参加した団体が奨学金によって支援しているスカラー（奨学金を受けている子供のこと）のいるスラム街は、昼間は子供たちが元気に遊んでいるような地域であった。しかしながら、夜は数多く存在するスラム街でも数本の指に入るほど治安が悪いそうである。また、昨年大きな火災が起きた関係で、一時期、住民が住めない状態になっていたそうである。現在は大半が元の状態に戻ったものの、一部は完全に瓦礫が

残ったままになっていた。この地域で支援活動に尽力しているデイビス牧師は、貧困が原因で学校に行くことが出来ない子供たちのために支援団体を立ち上げ、国内外を問わず支援者を募っているのだという。私の活動の具体的な内容として、子供たちと歌を一緒に歌ったり、曲に合わせて踊ったりした。さらに、食事配給では春巻きのようなものと白米を配った。これらの活動で感じたことは、国が違えども同じ子供であることに何の違いもないということである。どの子供も無邪気に抱きついてきたり、おいかけっこをしようと声をかけてくれたりした。

<家庭訪問>

活動期間中にスカラーがいる家庭を訪問し、家族から話を聞くことが出来た。1件目は母親が1人で、4人の子供を育てている家庭だった。その中でスカラーは1人だけだった。彼女の夢は先生になることである。母親は朝一で近くの市場に行き、生計を立てるための商品作りと子供の世話を同時に行う。父親はすでに他界しており、1日約500円、月約15,000円程度の収入しか得ることが出来ないという。因みにフィリピンの平均月収が約40,000円(国家統計局国際労働機関統計)



であることを加味すると、収入の低さが浮き彫りになる。母親はこれではとても満足した暮らしは出来ないと語っていた。しかしながら、それと同時に「家族がいるから毎日ハッピーなのよ。」と笑顔で話してくれたことが印象に残っている。今何が一番欲しいかと聞いてみると、全員が学校に通いきることが出来る額の資金と答えた。

2件目は両親と4人の子供、寝たきりの祖母と一緒に暮らしている家庭であった。この家庭もスカラーは1人で、彼の将来の夢はシェフになることである。母親はココナッツオイルを作って家庭を支えている。祖母は先月の火災で背中に大やけどを負ってしまったが、お金がないため継続して病院で治療することが出来ない。母親に教育の重要性について質問すると、「教育は子供たちが生きていくために非常に大切であり、仮に高校までの学歴に加

え、大学を卒業することが出来れば高収入の仕事に就ける。貧困のサイクルから子供を出し、さらに家族も今より確実に良い暮らしが出来ると信じている」と語ってくれた。

3件目は川の上に建てられた、スラム街にあるお宅である。この地域も最近火災が発生したことが原因で、家の建て直しが行われている最中だった。川が近くにあるため、大雨や台風で洪水が発生すると家は浸水してしまうそうである。訪問した家庭は母と娘の2人暮らしであった。母親は持病があり、定期的に病院に通っている。スカラーの将来の夢はファッションデザイナーになることである。古着や靴の寄付を行った際、とてもうれしそうに洋服を選んでいた彼女の顔が忘れられない。

<ごみ山で生活をする人々>

ごみを集めることで生計を立てている子供たちの実態調査と子供たちとの交流を行った。私にとって、この活動が特に印象深く、衝撃的であった。車を降りた瞬間に鼻を通る強烈なごみの匂いと、じっと立ってられない程の大量のハエに、最初は戸惑わずにはいられなかった。とても人が生活出来るような環境だとは思えなかった。子供たちはごみを集めることで一週間、約1,600円~2,100円の収入を得られるのだという。生きていくために環境より収入を優先せざるを得ないのである。また、一番の死因は傷んだものを口にして体調を崩すことだという。だからこそ、清潔で安全な食事を配給する活動は不可欠なのだと思う。この日はスパゲッティとパンを配給した。ここで生計を立てている人々は代々ごみを集めることを家業にしてきた人ばかりで、この環境や仕事が当たり前である。外部の人間が思うほど彼らはこの環境に失望してはいないのだ。子供たちとの交流では、ハンカチ落としやじゃんけん列車をしたり、おいかけてっこをしたりした。



<青空教室>



青空教室で出会った子供たちは平日学校に通い、土日は観光客に路上でキーホルダーや装飾品を売っている。しかし、観光客は商品を買うために近づいてくるストリートチルドレンを怖がって、中々買ってくれないのが現状である。地元の人が寄付としてキーホルダーを買うことの方が多いという。青空教室では最初、彼女たちの第一言語であるビサヤ語を教えてもらった。そこでは基本的な自己紹介や挨拶の仕方を学んだ。その後は厚紙に、自分の手形にカットした折り紙を貼り、各自そこに自分の夢や感謝の気持ちなど自由にメッセージを書いた。また、アクティビティとして一緒にダンスを踊っ

たり、箸でマーブルチョコを運ぶ競争をしたりした。観光客として来訪したのであれば、このようにストリートチルドレンの生活や実際の素顔を知ることが出来なかつただろう。

<公立小学校訪問>

フィリピンも日本と同様に、私立の学校と公立の学校がある。一般家庭の子供やスラム街で暮らす子供は授業料が無料の公立学校で学ぶ。一部の裕福層の子供たちは私立学校に通うことが出来る。生徒数は圧倒的に公立学校の方が多い。授業科目については、数学や英語など日本と大きな違いはないが、フィリピン国民の大半（80~90%）はキリスト教のため、宗教の授業が組み込まれている。この日は世界地図をクイズ形式にして一緒に学んだ。子供たちの学校での生活を見学して、気づいた点がいくつかある。まず、子供達が持ってくるお弁当は栄養バランスを考えたものというよりは、いかにお腹を満たせるかを考えたものだったということである。次に、しっかりとした勉強道具を持っている子供もいれば、鉛筆の上についている小さな消しゴムを大事そうに使っている子供もいたということである。公立小学校といえども子供の経済状況は様々であることを実感した。



<支援活動を通して感じたこと・学んだこと>

貧困層の人々は十分に教育も受けられず、毎日生きていくのが大変で、幸せな生活を送ることが出来ない。このような先入観をどれだけの日本人が持っているのだろうか。私自身も活動に参加して、少なからず日本での生活と比較して彼らのことを考えていたことに気づかされた。確かに貧困層の人々が置かれている経済状況や生活環境は深刻であり、改善しなければならない。想像していたよりも、スラム街で暮らしている子供の就学率は低くないが、学校に籍はあるものの家庭の仕事の手伝いで実際に学校に通えない子供もいる。また、ごみ山で暮らす人々は生活環境でさえも常に危険性を孕んでいる。私は貧困からの脱出に教育が最重要と考えるが、子供たちが十分な教育を受けるには時間もお金もかかる。私が今回参加した団体が支援している子供の数も限られており、課題の根深さを痛感した。だからといって、彼らは生活や将来に絶望し、辛いと思いながら日々を過ごしているわけではない。出会った人に、今が幸せかと質問すると、全員が「家族がいるから毎日幸せだ。」と即答したのだ。貧困には基準が存在するが、幸せの捉え方は人それぞれである。豊かさを知っている人間は、当たり前な幸せを大切には思いにくく、高望みをしすぎているのではないだろうか。支援活動を経験した私が今出来ることは、フィリピンの貧困層の現状を周りに伝えることである。さらに今後は、これらの問題を深く考えるために必要な、国際開発論などの知識について学んでいこうと思う。